

○重点努力目標に対する取組

1 令和2年度の重点努力目標<(1)～(4)>と本年度の取組<罫線内>

(1) 授業力の向上 (教師→教師)

- ・「学び合い」を通して学ぶことの達成感、充実感を感じさせ、将来の自立した学びにつながる授業を展開する。

年度当初は新型コロナウイルス感染防止のため、生徒同士がかかわり合う授業はできなかった。やや収束した時期から班学習や話し合いが行えるようになった。10月にタブレット端末が配布されたことにより、それを利用した授業実践が多く見られるようになった。口頭での発表や話し合いでなくても生徒の考えを集約、提示できるようになった。目標に対する達成度としては低いですが、次年度以降の目標達成に向けての実践に見通しがもてる状況が生まれた。来年度は、令和4年度の研究発表に向け、実践を積み重ねていく。

(2) 学級経営力の向上 (教師→生徒・生徒→生徒)

- ・「級訓」「学級目標」を明確にし、一人一人の個性を生かしながら、集団としての成長につながる学級経営を行う。

集団としての成長の大きな契機となる体育大会の応援合戦、合唱コンクールを何とかやり遂げることができた。取組の過程で学級担任に対して、「級訓」「学級目標」に立ち返るような指導を促す助言を行った。制約の多い中ではあったが、二つの行事を通じて学級への帰属意識や自己有用感を高められた生徒の姿が報告された。年度末を迎え、「自分たちの学級」という意識が育ってきていると感じる。

(3) 集団の中で、生徒自身が課題を発見し解決する力

- ・「生徒自治」の精神を継承・発展させ、学校生活全般にわたって、リーダーを中心に生徒主体で計画・運営・評価しながら活動できる機会、場を保障する。(生徒→生徒)

夏休みに予定していたリーダー研修会が中止となり、リーダーの養成という点では不安があったが、生徒会担当をはじめ、学年、学級、部活動、委員会の各担当が「課題を発見し解決する力」の養成という視点で指導する姿が見られた。特に、各学年では室長会が中心となって活動が計画され、生徒自治の精神が途切れることなく受け継がれていることを感じる。

(4) まちづくりへの協働・貢献 (地域←→生徒・教師)

- ・まちづくりへの生徒の主体的な関わりの場を保障し、地域と協働して活動する中で、地域の一員としての自覚を高める。

多くの活動が中止となり、街路樹ボランティアの活動と文化協会会員の作品展示ができただけであった。次年度以降の地域との関わりを絶やさないようにするために、「南中学校支援者交流会」を立ち上げ、これまで学校に協力してくださった方々に、南中学校に対する理解と今後の協力を依頼した。

(5) 特別支援教育・不登校指導体制の充実

- ・支援指導方針を再確認、全職員で共通理解し、特別支援教育・不登校支援を必要とする生徒の実態を共有し、段階的な指導を組織的に行う。

本年度より通級教室、日本語指導教室が開設され、さまざまな面で支援を要する生徒にきめ細やかな指導ができるようになった。職員会や担当者会など通じて生徒理解に努めてきたが、組織的、専門的な指導体制を完成するには至っていない。本年度の実績を元に、指導の一層の充実を図っていく。

(6) 教育基本構想の推進

- ・2中、学区小学校とのつながりを意識し、教育基本構想推進事業を生かした取組を工夫する。

他校との交流に制限があり、十分な活動ができなかった。高浜市が育てていきたい生活習慣・学習習慣については、学年だよりなどで周知するなどして継続した取組が見られた。

(7) 多忙化解消の推進

- ・生徒と教職員にとって、活動や取組の価値・成果とそれにかかる労力のバランスを考えながら、多忙化解消の具体策を見だし実践していく。

具体的な改善策を講じることはできなかったが、コロナウィルスへの対応が行事・活動を見直す契機となり、必要なこと、不要なことを精査することができた。また、効率や効果を考えるという意識が芽生え、次年度の取組を考えていく上で生かすことができる。

2. まとめ

「やらないための言い訳を考えるのではなく、知恵と工夫を出し合ってやり切ろう」を合い言葉に、コロナ禍を乗り切ってきた。2か月遅れのスタートではあったが、教師と生徒が危機意識を共有しながら、授業、部活動、行事に取り組んだ結果、いつもの年に遜色のない「南中文化」を具現化することができた。しかし、本年度の大きな柱である「自立」に今ひとつ踏み込めなかったことも事実である。仕切り直すつもりで、次年度再挑戦したい。

本来なら、本年度は令和3年度の研究発表に向けての授業実践の積み重ねの一年となるはずであったが、「どうせやるのなら充実した研究にしたい」という職員の声を受け、教育委員会に発表の一年延期を認めていただいた。来年度は、思う存分授業に打ち込める一年とし、研究発表へとつなげていきたい。また、タブレット端末の全員配布が、研究の可能性を広げてくれたと感じている。構想段階で思い描いていたことが、タブレットの活用で容易になりそうなこと、想定していなかったことまで実現できそうなことを予感している。